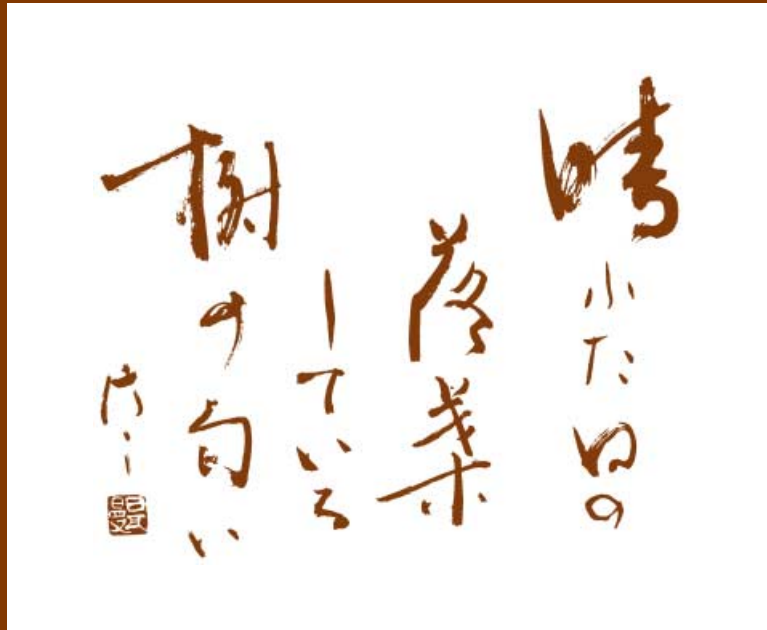


HAIKU KAKAN

花冠

ホームページ <http://kakan.info/>



11月

通巻335号

花冠ツィッター句会今日の香句抄

高橋正子選評

- ★用水の水音軽し花いばら 津本けい(五月九日)
花いばらが用水路の水にかぶさるように咲いている。水も楚々とながれ、明るくやさしい光景を見せている。句のリズムが軽く、内容とあっている。
- ★夏燕飛び交う空の朝早き 高橋秀之(五月二十一日)
早朝の空に飛び交う「夏燕」に夏の朝の爽快さが詠まれている。「夏燕」に託す思いが爽やか。
- ★万緑やわが人生はかく愉し 河野啓一(五月二十五日)
一読、肩の力が抜けて、とても愉快になる。万緑を吹く風、万緑の光万緑の色などを愉しと思う心軽い心境をすでもっておられるからできた句。
- ★ポケットに鍵のふくらみリラの風 藤田洋子(五月二十八日)
ポケットにいくつも鍵を入れて出かける主婦の普段の生活。そういう生活にも、リラの咲く風が吹くと、洒落た生活となる。「リラの風」が作者の姿をよく浮き上がらせている。
- ★青葉冷え鉢泉の湯気湧きのぼる 小川和子(六月三日)
青葉の中に勢いの湧く鉢泉の湯気が立ち上って、自然の力の大きさを感じる。「青葉冷え」なので、身体にそれが伝わる。
- ★夏雲雀見上ぐ帽子の鰐をあげ 黒谷光子(六月十三日)
夏雲雀だから「帽子の鰐をあげ」が納得できる。空に揚がる雲雀を追って、帽子の鰐をあげれば、夏空が眩しくかかやく、鰐をあげて見る世界は明るくて広い。
- ★青無花果草の香りと交ざりけり 桑本栄太郎(六月二十二日)
無花果は、いまでは、見捨てられたような草地の畑の育っていることが多い。青無花果の匂いと、夏草の匂いは共に青い匂いながらも、確かに違つて、交じつて匂う。
- ★夜店に掬う赤き金魚を子が持てり 後藤あゆみ(七月十一日)
夜店に掬う金魚は、たいてい赤か黒だが、敢えて「赤き金魚」と表現したので、涼しい赤い色が目に浮かぶ。「子が持てり」には楽しさや可愛らしさが読みとれる。

- ★管弦船万灯揚げて海に出づ 佃 康水(七月十八日)
宮島の「管弦祭」は、ただの「祭り」では、表しにくい。「万灯を揚げて」「海に出づ」は、瀬戸内の穏やかな海でこそ出来ること。管弦祭の臨場感が出た。
- ★妻の手に濡れて溢れて茗荷の子 古田敏二(七月二十二日)
茗荷の子は、私の経験でも、露に濡れた葉に手を入れ、少しは土に汚れていいるのを摘み取った記憶が多い。「濡れて溢れて」がいい。それも妻の手にあること。
- ★桃きらきら甲斐の端山の土産屋に 川名ますみ(七月二十五日)
甲斐の連山を下り、八里も近くなったところに、甲斐名産の桃が土産に売られている。「桃きらきら」とした感覚に、無疵の桃のみずみずしさ、ういういしさで書いている。
- ★岩つたう山水飲んで夏山へ 迫田和代(七月二十六日)
夏山の登り口まで着くと、岩をつたう冷たい山水があつて、喉を潤して休憩をとる。英気をやしなつて、これから登山開始となる。夏山登山の「こまが、新鮮に詠まれている」。
- ★立つものは向日葵ばかり畑の屋 上島祥子(七月二十九日)
真夏の昼の畑は、南瓜が地を這い、茄子は低く育ち、小葱なども葉が白けて、立っているものは、向日葵ばかり。それだけに向日葵の姿が独特に浮かび上がる。
- ★畦草を刈りて定かや稲の花 小口泰典(八月十一日)
稲の花が咲くころは、畦草も伸びてくる。それを刈ると畦がさっぱりとして、稲の花の存在が定かになる。取り合わせの句ではないので、稲の花が生き生きとしている。
- ★子燕のみな発ち空に声のあり 安藤智久(八月十二日)
子燕が育ち、巢立ちをし、みんな空で轉るようになった。子燕を見る目がやさしい。空にある声に子燕のかわいく元気な様子見える。
- ★球追えば芝に群れなす赤とんぼ 小西 宏(八月十四日)
おおあおとんぼに球を追うと、そこは、秋が来ている。芝生に低く飛ぶ赤とんぼに、さわやかな風が立つ。イメージが鮮明で、句に力があふぶ。
- ★見ゆるものみな新涼の影を持つ 多田有花(八月二十六日)
秋に入ると、目に映るものが新鮮に捉えられる。見えるものの影にも夏とは違つた新しい涼しさ加わる。

花冠(Kakan) 平成二十三年十一月一日発行(毎月一日発行)

第二十九巻第十一号(通巻三百三十五号) 定価五〇〇円

十一月号 目次

新涼抄……………1
 秋麗に……………高橋 信之…2
 スカイツリー……………高橋 正子…3
 作品七句①……………4
 黒谷光子・藤田洋子・多田有花・桑本栄太郎・河野啓一
 宮地祐子・後藤あゆみ・小口泰興・佃康水・小川和子
 川名ますみ・安藤智久
 インターネット俳句センターアクセス百万回特集…10
 高橋信之・高橋正子・藤田洋子・柳原美知子・古田敬二
 多田有花・高橋秀之・平田弘
 寝椅子……………平田 弘…14
 松涼し……………川本 良子…14
 作品七句②……………15
 下地鉄・柳原美知子・古田敬二・小西宏・井上治代
 祝恵子・藤田裕子・上島祥子・津本けい・村上伸生
 堀川喜代子・高橋秀之・渋谷洋介・迫田和代・原順子
 飯島治朗・白川友行・足立弘
 選後に……………高橋 正子…18
 俳句日記……………高橋 正子…19
 子どもの俳句……………20
 題字・表紙俳句（晴れた日の
 落葉している樹の匂い）……………高橋 信之

川本臥風鑑賞（五）

かけ稲の穂先しづかにそろひけり

川本 臥風

刈取られた稲は、乾かすために稲架に掛けられる。ずっしりと実った稲は、穂先を揃えて稲架に垂れ下がる。その稲穂の重みの集まる穂先が揃って揺れもせずしづかなのである。穂先が揃うところに作者の神経の集中と緊張がある。しづかでありながら神経は張り詰め、高い次元に心が置かれているのである。「観照が素直である」と言っただけでは収まらないものがある。

（高橋正子）

（後記）

★今月号は、十一月号ですけれども、「インターネット俳句センター」のアクセスが、八月二十四日に百万回に到達しましたので、その記念号としました。百万回目を踏まれたのは、松山の藤田洋子さんと、花冠創刊の地で、長くお世話くださった、百万回目のアクセスにもっとも相応しい方と皆さんと喜びました。

★インターネット俳句センターは、花冠（旧水煙）のホームページとして、一九九六年十一月二十七日に信之先生によって開設され、活動を始めました。百万回に到達するまでには、実に多くの方がホームページを見たり、花冠に実際に入会くださったり、または、去っていかれました。現在花冠会員として残っておられる方々と打ち解けて百万回をお祝できることを、幸せに思っています。大変内容の深い温かいメッセージをたくさんお寄せいただき、ありがとうございます。今月号と来月号に分けて掲載の予定です。

★開設以来十五年になりますが、初期の大きなデスクトップ型のパソコンを思い出すと、隔世の感があります。インターネットを利用するからには、インターネットやパソコンの特性をよく知らなければいけないと、張り切ってマクルーハンや初歩の情報工学系の本を読んだり、東大のランゲージパワーというサ

イトから情報を送ってもらったりしました。特に信之先生は、松山の会員や学生たちと試験的な試みを多くされました。ユネスコの詩の部門に日本で唯一花冠（旧水煙）が取り上げられたのも初めのころです。ユネスコからの調査（簡単な論文ほどのものでしたが）を受け、ここで性根を入れなければと、調査に答えて英文を書いた日もありました。振返れば、言い尽くせないことがたくさんあります。

★ホームページの活動で心がけたことは、主には三つあります。二十四時間以内に返事をする。パソコンの画面では、向こうに相手がいるような感覚になるので、そのことに配慮する。使用する言葉は、平明で、どなたにも失礼のない、短い文にする。こういったことに腐心しながら、活動を進めて来ました。幸いにも、みな様からのお祝いのメッセージにそれらを、よいことと思っただけだと思っているのが読み取れて、大変嬉しく思いました。百万回は区切りですが、これまで通りに俳句を楽しんでいただければ幸いです。

★裏表紙は、ツイッター句会の今日の秀句からです。はじめてのツイッター句会です。（正子）

★訂正（十月号十三頁下段
 二十一行目と二十三行目）
 誤「物質と時間」
 正「物質と記憶」

御案内

☆月例会
 第二日曜日。
 詳細は後日ご案内いたします。
 ☆月例ネット句会・ブログ句会
 詳細はホームページをご覧ください。
 ☆花冠作品投句
 毎月十日締切・雑詠十句以内
 ☆投句・送金は花冠発行所へ

花冠第二十九巻第十一号（通巻第三三五号）

平成二十三年 十月二十日印刷
 平成二十三年十一月 一日発行
 創刊者 高橋 信之
 編集発行人 高橋 正子
 印刷人 帆谷 一江
 発行所 花冠発行所
 〒二三一〇〇六二
 横浜市港北区日吉本町三丁目四〇一四一〇五
 電話 〇五〇一三六四一八八二七

印刷所 有限会社 龍華堂
 電話 〇八九九二四一四六六六
 定価 五〇〇円
 同人費 三万円
 （誌代・ネット使用料・諸雑費を含む）

球追えば芝に群れなす赤とんぼ	そよぐもの九月の風にみな軽し	子燕のみな発ち空に声のあり	新藁のぬくもりのまま畝に撒く	さみどりの稲穂のうねり風の音	苧殻焚き残る匂いの土均す	山々を吹きわたりゆく盆の風	指先に匂い移して茗荷の子	見ゆるものみな新涼の影を持つ	橡の実の棘なき黒の転びけり
小西宏	川名ますみ	安藤智久	宮地祐子	後藤あゆみ	藤田洋子	河野啓一	黒谷光子	多田有花	桑本栄太郎

秋麗に
高橋 信之

やぶ蘭 <small>横浜四季の森公園五句</small> の花咲く森の木洩れ日に	やぶ蘭咲くせせらぎ響く森の中	森に生き秋蝉のはげしく鳴ける	森の高きところ秋風確かに吹く	森拓かれて秋天の青あおと	いたどりの葉を開きいて花の穂を <small>向島百花園五句</small>	芭蕉句碑秋の七草咲く庭に	下町に妻と来ていて秋麗に	萩女郎花藤袴咲き今日がある	弁当のおにぎり旨し秋高し
---	----------------	----------------	----------------	--------------	--	--------------	--------------	---------------	--------------

施 餓 鬼 寺

藤田 洋子

芋 殻 焚 き 残 る 匂 い の 土 均 す
皿 重 ね る 音 の 澄 み き し 盆 の 夜 々
白 桃 の 仏 間 ひ そ か に 匂 わ し む
盆 過 ぎ の 汽 笛 を 長 く 夜 汽 車 曳 く
施 餓 鬼 寺 信 徒 溢 れ て 灯 の 外 に
土 色 の 水 が 水 押 す 秋 出 水
台 風 の 去 り し 陽 と 風 白 布 干 す

溝 萩

黒谷 光子

音 続 き 浜 の 花 火 の 佳 境 ら し
丁 寧 に 拭 き 本 堂 の 涼 し かり
預 かり し 小 犬 な つ き て 秋 う ら ら
紺 一 輪 観 察 日 記 の 朝 顔 に
溝 萩 の 水 辺 に 咲 け ば 穂 の 長 き
指 先 に 匂 い 移 し て 茗 荷 の 子
秋 茄 子 の 籠 に 溢 れ て 軋 み 合 う

スカイツリー

高橋 正子

お み な え し 黄 が 澄 み く れ ば 力 あ り
咲 き 満 ち て 眼 に ち ら ち ら と 萩 の 紅
潜 り 入 る 萩 の トンネル 咲 き 初 め し
萩 の トンネル 真 上 ば ら ば ら 空 が あ り
葛 棚 の 葛 の 花 立 ち 日 が 当 たり
藤 袴 スカイツリーの いや 真 直 ぐ
ジ ン ジャ ー の 花 を 見 て 後 ち か き 氷
い た ど り の 花 水 音 を 聞 い て い る か
唐 糸 草 秋 が 来 て い る こ と 確 か
花 魁 草 紅 澄 み な が ら 枯 れ そ め し

新 藁

宮地 祐子

杖で指す秋草の名を我に問い
高階の病室に見る秋澄めり
入院のバッグの底に秋の服
秋冷やレタスのみどり凜として
水撒けば光る秋蒔終えし畝
大根蒔き終えて大きな茜空
新藁のぬくもりのまま畝に撒く

小鳥来る

河野 啓一

山々を吹きわたるゆく盆の風
百日紅夕べの色濃かりけり
夏潮の静かに寄せて大鳥居
街道に沿いて明るき稲穂波
秋光に病室の窓広かりき
空晴れて愉しき朝や小鳥来る
青空を載せて箕面の山は秋

橡 の 実

桑本栄太郎

雨ふふみ稲穂ゆつたり立ちて居り
橡の実の棘なき黒の転びけり
秋高の空は風らし千切れ雲
爽やかに図書館通りの掃かれけり
うす衣の僧の独りや珈琲館
山陰鳥取県線の二輛列車や真葛原
色づけば路をせばめり猫じやらし

新涼の影

多田 有花

緑陰に停めておのおの昼休み
沖青し入道雲を浮かべおり
朝蟬に途切れ途切れのリコーダー
初秋の空は飛行機雲を載せ
よく晴れて遠くで光る鳥脅し
稲穂垂れ初めにし道を墓参り
見ゆるものみな新涼の影を持つ

桜紅葉

小川 和子

とんぼうの入りくる画廊開かれて
秋草の息づく沢の音澄めば
土砂降りに秋又一步深まりぬ
父母遠く紅葉葵の吾を迎う
行く道にはや散る葉あり桜紅葉
狗尾の群れてみどりの風を呼ぶ
ふつくらと荅幾つも桔梗咲く

原爆忌

佃 康水

巨大なるテントの灼ける慰霊碑前
満員の市電の軋む原爆忌
救急箱開けないままにキャンプ終ゆ
かなかなや瀬音包みて鳴きやまず
赤蜻蛉追う孫の眼の輝けり
本堂を磨き明日より盆法会
盆踊り三味も太鼓ものつて来し

稲の花

小口 泰興

山の雲山に去りけり百日紅
夏霧の木立越ゆるや牛の声
榛名湖の水を掬いし秋はじめ
畦草を刈りて定かや稲の花
赤城嶺を後ろに置きて秋刀魚焼く
新蕎麦や信濃に続く峠道
軽やかな瀬音聞こゆや稲の花

出穂水

後藤あゆみ

さみどりの稲穂のうねり風の音
床の間にりんどう一輪山の宿
蜻蛉群れ榛名山頂晴れ晴れと
どの庭も刈られさっぱり盆近し
月の夜の出穂水の音鳴りやまず
小さき手が盆の団子を葉に包む
浮かべればすぐに流れて盆の舟

九月の風 川名ますみ

トンネルを出づれば濡れし夕立あと
百日紅の並木揺れたる新聞社
迎火や公園はまだ試合中
お棚経数珠の珊瑚のひいやりと
祭笛雨の消えゆく静けさに
朝採の瓜ふくふくと浅みどり
そよぐもの九月の風にみな軽し
稲刈りの香りの中の無人駅
土を付け下がる土俵や秋祭り
長雨の上がり煌めく猫じゃらし
ガラス戸に触れ曇天へ秋の蝶
甲斐の日の香る葡萄の一粒よ
餅まきや浴衣の子らの伸ばす手へ
子燕のみな発ち空に声のあり

秋祭り 安藤智久

インターネット俳句センター

―アクセス百万回特集―

① 高橋信之（花冠創刊者）

句作や詩作・創作といった行為は、個人的なもので、結社・俳壇・マスメディア等とは、本来関係のないものだが、個人的な行為がひとたび社会的な組織で取り上げられると、その個人的な行為は、作者の手を離れる。作品は、作者の手を離れ、作者の意図するところとは違ったところへ向かう。文学作品の多くは、俗なところへと落ちて行く。

ネット上のウェブサイト「インターネット俳句センター」を設立したのは、十五年前だが、その意図するところは、俳壇・マスメディア等とは、距離を置き、作者の内面を損なわない俳句を作ろうということであった。そのための俳句仲間を必要とし、私たちの俳句雑誌「花冠、旧誌名水煙」は、「感性の共同体」であることを目指した。ウェブサイト設立十五年目の今年、アクセス百万回を達成し、「感性の共同体」であることは、ほぼ間違いない。

インターネット俳句センターは、開設以来、様々な試みを行った。どれもがそれなりの成果を上げ、それを次の展開へと引き継いできた。ウェブ上での俳句の保存は、今では、句集などの俳書を電子書籍として保存する。句会の初めは、開設翌年の掲示板(BBS)である。「投稿者高橋信之、投稿日11月07日(金)03時06分15秒で、「秋冷の闇の奥から少しの風 信之がネット句会第一号の俳句となった。その後、掲示板句会に始まり、メーリングリスト句会、ブログ句会を経て、今では、ツイッター

句会を開催している。ツイッター句会には、参加者がお互いを身近に感じ、昔からの句会に最も近いものとなった。「膝を突き合わせて皆様と会話をしているようで、ぐっと距離が縮まったように感じております。」と言っていたいたのは、参加者の後藤あゆみさんからで、これも「感性の共同体」ということで、ツイッター句会についての嬉しい感想です。

ネット上での、これからの課題として今取り組んでいることは、「連携」ということで、ツイッターとフェイスブックとブログ、そして「インターネット俳句センター」というウェブサイト等の相互の「連携」である。花冠同人の幾人かはすでにこれらの「連携」を試みている。その効果がアクセス百万回達成であり、グーグルの俳句検索で上位を維持していることである。九月七日は、約千三百三十万件中の第四位であり、すべての俳句団体、現代俳句協会、日本伝統俳句協会、俳人協会、NHK俳句王国、角川「俳句」などよりも上位にある。これは、花冠が「感性の共同体」であることの証左でもあり、花冠同人の俳句を誇りに思う。

② 高橋正子（花冠代表）

インターネット俳句センターは高橋信之先生によって、花冠（旧誌名水煙）のホームページとして、一九九六年十一月二十七日に開設されました。それから、数えて、本日、二〇一一年八月二十四日に、アクセスが百万回となりました。百万回の数字をどう読むかは、ホームページの目的等によりさまざまと思われませんが、私たちのインターネット俳句センターがアクセス百万回を数えたことは、大きな意義があります。ネット俳句の草分けとして、さまざまな試みを致しました。細く長くをモツ

トーとしてこれまで継続したことが、なによりの力となったと思います。皆様のご支援、ご協力に感謝し、厚くお礼を申し上げます。今後も、インターネット俳句センターで、俳句をお楽しみください。

百万回目のアクセスをされたのは、藤田洋子さんで、「8月24日（水）21時39分25秒」でした。おめでとうございます。アクセスされたとき、「1000000」の数字が出て、ひどくびっくりされたそうです。

③ 藤田洋子

信之先生、正子先生、「インターネット俳句センター」アクセス百万回達成、おめでとうございます。去る八月二十四日の夜偶然にも百万回目のアクセスに遭遇し、私にとっても忘れ得ぬ喜びとなりました。またこうして、誌友の皆様とともに、この喜びを分かち合える幸せを感じ、「インターネット俳句センター」との縁に深く感謝申し上げます。

一九九六年の開設以来、長年続けてくださる途方もないご苦労も、今日の発展をもって報われる思いがいたします。私自身入会より「インターネット俳句センター」と共に歩ませていただいた歳月、全国各地の同人の、日常生活から生まれる日々の豊かな俳句に接しながら、皆様と俳句を享受し、学び、あたたかな心の交流をさせていただきました。デイリー句会から現在のツイッター句会に至るまで、欠かすことなく互選、選評を積み重ねていただき、俳句の教えはもとより、細く長く継続してゆく大きな力をお教えいただきました。また、ネット句会に加え、折々に参加させていただいた諸行事の一つ一つが、大切なよき思い出として心に刻まれています。

励まされ、明日への元気や希望をいただきました。デイリー句会は、ブログ句会、ツイッター句会とその時々最新の形を取り入れられ、進化しているのも驚きです。

水煙創刊二十周年の二〇〇三年、ネット句会で知り合った全国の句友が二十人程松山に集い三日間にわたって交流を深めた俳句フェスティバルは、忘れられない思い出です。またこの年「水煙俳句叢書」が刊行され、拙句集「島の春」も加えていただきましたが、今電子書籍として、ネット上でそれらを読ませていただけるようになるとは、想像だにせぬ喜びでした。オンライン、オフライン相まつの花冠のこれまでの地道な活動と充実した日常生活を大切に、言葉遊びではなく「まこと」を詠む作句姿勢に裏付けられた花冠の句座は本当に素晴らしいと思います。これらの全てが詰まった唯一無二のインターネット俳句センターが今後も多くの人の心に届くよう願っています。

⑤ 古田敏一

アクセス百万回達成おめでとうございます。

私が初めてインターネット俳句センターに出会ったのは、今から十三年余り前、一九九八年の一月でした。定年一年前くらいの時でしたが、親しかった歌仲間の後輩が急逝し、なぜか、その事を俳句に詠みました。今のように、検索エンジンが発達していなかったのですが、偶然、インターネット俳句センターに出会うことができました。インターネット俳句センターに出会うことは一九七六年、私が出会う前年でした。今、その記録を覗いてみますと、一日のアクセス数が二、三件、時によっては一週間近く投稿のない日も見受けられます。私が初投稿

今もなお、弛まぬ努力と熱意を注がれ進化し続ける「インターネット俳句センター」は数多の俳句サイトの中、常に上位に選ばれ、各種ネット句会、オフ句会、信之先生の俳句論評、正子先生の俳句日記他、膨大な資料が保存管理され、日々更新され、その充実さは読者の皆さんを魅了します。これからも、お一人お一人の人生に、明るい希望や豊かな生きがいを見出せる場として、ますますご発展されますよう心からお祈りいたします。

④ 柳原美知子

インターネット俳句センターアクセス百万回達成を心よりお祝い申し上げます。

信之先生が「水煙」のホームページとして開設され、現在の「花冠」に至るまで十五年間、お住まいも松山市郊外から市内横浜、と移られる中、正子先生と共に休むことなくインターネット俳句センターを運営され、より新たなものへと発展させられたことに驚嘆致します。両先生のネット俳句への高いお志と想像を絶する長年のご努力とご指導に敬意と感謝の気持ちで一杯です。

開設当初、俳句結社の主宰のネットを通しての指導は先進的な試みで、英語やドイツ語の俳句に取り組まれていたこともあり、国内外からの反響も大きく、ユネスコの詩の部門に日本では唯一「水煙」がとりあげられていました。

私は一九八八年から入会していたもののネット上での句会に参加したのは二〇〇〇年からでした。初投稿のデイリー句会、月例のオンライン句会で、全国から寄せられた俳句の多彩さ、新鮮さに目を見張りました。そして両先生や皆様のコメントに

した日、一九九八年二月二十日は十一件でした。私自身も今のように毎日投稿など出来ず、数日間空白だったこともありました。当時は、掲示板形式で、信之先生と一対一のやり取りでした。

公衆回線からADSL回線、ISDN回線、そして今の光回線とIT技術の進歩が目まぐるしく進歩しました。回線スピードは、ISDNでも64kb/sec、128kb/secで、今のMb/secなど想像すらできなかった時代でした。

インターネット俳句センターもIT技術の進歩（公衆回線からADSL回線、ISDN回線、そして今の光回線など）に合わせて進化しました。世の中に、俳句関連のWebはたくさんありますが、インターネット俳句センターのようにコンテンツの充実したものは見当たりません。最初のころの掲示板形式から、Blog形式、今のWordPress形式まで、時代の先端技術を俳句の座に応用される信之先生の知識、知恵、応用力には感服するしかありません。進んだIT技術ができてそれ単なる技術であって、それをWebにどのように応用するかは個人の能力、努力に依拠するのです。先生の能力と努力がなかったら百万回のアクセス達成は遠い遠い未来のことだったでしょう。

このような素晴らしい場にいることを幸せに思わなければいけません。末永くインターネット俳句センターが続くことを心から願うものです。

⑥ 多田有花

インターネット俳句センター百万アクセス突破おめでとうございます。俳句という日本の伝統文芸のサイトがこれだけのアクセスを達成されたということは、まさに偉業です。

高橋信之先生がこのHPを開かれたのが一九九六年、インターネットが日本でもよく注目され始めたいわば草創期です。その早い時期にネットの将来と俳句を結びつけ、インターネットを介して俳句を詠むという活動を開始されたその視pointsの確かさに敬服いたします。また、それが大変困難な道であることは、現在の時点においても正統的な句会活動をネット上でおこなっているところが『花冠』以外に見当たらないことから、十分察することができます。

私が『花冠』に参加させていただくようになって、すでに十年以上になります。きっかけはインターネット俳句センターとめぐり合ったことでした。ネットサーフィンで偶然俳句教室に出会い、正子先生の添削指導を受けました。あのとき、翌日には必ず添削とコメントをいただけるということにひかれ、毎日投句をするようになりました。インターネットならではのスピード感、それを十分に活かされた俳句センターの活動が私と俳句を結びつけてくださいました。

俳句という日本独特の短詩文学とご縁をいただいたことは、何よりも素晴らしいことでした。富士山頂で俳句を朗読するといった経験もさせていただきました。また、インターネットを通じて全国各地の同人のみなさんの日々の暮らしに接することができたのは大きな喜びでした。

さらに、俳句そのものほもちろん、俳句を通して身の回りの自然を見る目を養っていただきました。自分の生活の中に俳句とそれを通して培われたものが根付いているのを感じています。百万アクセスは偉大な通過点だと思っっています。今後も明るくて深い俳句の境地を目指してさらに進まれるでしょう。同人のひとりとしてご指導いただけることを今後も喜び、励みにしております。

⑦ 高橋秀之

「インターネット俳句センター」アクセス百万回達成、誠に改めてとうございます。ホームページ開設が一九九六年十一月二十七日です。それから約十四年と九ヶ月。長い道のりを続けてこられたのは、ひとえに管理者である高橋信之先生と高橋正子先生のご努力の賜物であると存じます。

私は、百万アクセスが偉業であると考えるのは大きく二つあると考えています。ひとつは、長きに渡って、途絶えることなく続けてこられたこと。もうひとつは、その間、絶えず更新を続けてこられ、充実したコンテンツを維持し、発展させてこられたこと。この日々のご努力があつての結果であると思います。ひとくちに十四年九ヶ月と言っても、開設日が誕生日の子どもが今は中学三年生となるわけです。そして、その長い年月、HPをきちんと管理し、更新を続けてこられたことは、簡単なようでとても大変なことだと存じます。

私が、当時の水煙の仲間に加えていただいていたのが二〇〇二年の夏です。九年余りになります。インターネットを介したネット句会という形式でなければ、俳句を楽しむことはなかったでしょう。俳句を楽しむことで、物事の見方、感じ方も幅が広がったと感じております。

そんな私が、開設日のころは、まだ二十九歳。結婚もしておらず、もちろん子どもも生まれていないわけで、今、長男が十二歳（小学六年生）であることを考えると、本当に長い年月であつたと思います。そしてただ長いだけであれば、実は、私の細々としたHPも、開設が二〇〇〇年九月なので、十一年になります。アクセス回数は約五万五千回。最近ブログやSNS中心になつているのでトップページアクセスが減少している

寝椅子 平田 弘

網打し魚形そのまま夜光虫
稲妻の枝分かれする美しさ
夕餈にはオクラの星の緑添え
くず餅に甘き涼しさ味わいぬ
この角は芙蓉の花よ今日も咲く
新涼を一息入れし寝椅子かな
渦巻きにするほど長き豇豆かな

松涼し 川本良子

松涼し池に輪をかく波のあり
ビル解体今朝の露草ちらとのこし
青楓皿の上流水の絵の上に
秋海棠中庭満たしても淋し
中庭のみどりの中に風生まる
青田に水落とす音ばかり二十日月
ベトナムの大夕焼に着陸す

ことを割り引いても、というかそんなネット環境の変化の中で、個人が管理するHPで百万アクセスを達成することがどれだけ大変なことなのか、実感として分かるつもりです。

この間、試行錯誤も繰り返しながら、日進月歩のネット環境の変化に遅れることなく、たゆまぬご努力を重ねてこられた先生方に改めて敬意を表するとともに、これからもネットを通じて俳句の世界が広く、かつ、更なる発展することを念願いたします。百万アクセス達成のお祝いとさせていただきます。

⑧ 平田 弘

インターネット俳句「水煙」に到達するまで三〇四件をさまざまよい、松山に対する伝統を感じご指導をお願いし、そのスピードとぐんぐんと引き込んでゆかれる点まは夢中になって二年ほどたち、句集のご指導を受けながら親しんできました。本来の姿は師を囲んだ座の許薫陶を受け成長するものながら、インターネットを通じて人柄も目の前にあるかの如き雰囲気でもこられました。途中より体調芳しからず、細く長く俳句に親しみ自然に会得とのご指導もあり今日に至りました。百万回はそれだけ人を引きつけ、水煙、花冠に多くの人が惹きつけられた証、誠に喜ばしい限りです。九十年生きてみて、ご指導を受けた先生は多くおられますが、生涯に影響をもたらした師は陸軍士官学校予科の一年間の教官三岡健次郎先生でした。その教えは以後七十年を支配、戦後では高橋信之、正子先生であると思えます。今後共ますますのご指導とご鞭撻をお願いいたします。

(次号に続く)

島 秋

水平線の両手にひろき島の暮れ
さざ波の等間隔に秋の増し
朝風や一夜にひとつ秋の増し
りんだうの蕾のままを供えけり
残暑の子気がつけば早寝息して
エーサーの声も遠くに盆祭り
ベランダの芽吹く桔梗に今朝の風

盆 提灯

盆提灯淡くともれる朝の窓
門火焚く雨の洗いし土の上
蛸鳴く山麓の湯の静けさに
古民家の梁黒々と秋気まとい
まづ酔橋しぼり味わう土瓶蒸し
新涼の卵を割ってオムレツに
さやけて新しきルーージュさしてみる

冬 瓜

揺ぎ無く冬瓜大地に座りけり
盆の日の供物すべてが丸々と
驚草の飛翔の向きはそれぞれに
鉢を置く夕べの風にちろ鳴く
とうきびを挽ぎ取り太し実も茎も
木曾は秋漆の器の光りけり
秋の水こぼして水車光りけり

秋 雲

白日傘丸き背の母つみお
昇りゆく花火大輪天空を
夕映えに高み明るし百日紅
秋雲の静けき音の秋初めに
点滴の静けき音の香を広げ
さわやかな風青畳の香を鳴く
星明かり無くも四方にちろ鳴く

秋 扇

ゴーヤ棚透かして居間に優しき陽
制服の丈を伸ばして休暇明け
秋扇母子同時に扇ぎだし
ギンヤンマ高度垣根のわずか上
葉を散らすケヤキに流れの音清し
清流に流れ着きたる椿の実
清流や流れて木の葉は波に消ゆ

飛蝗跳びだす

星の夜の土手埋めつくし月見草
鳥追いの張られて眩し稲田かな
実りゆく稲田の水のなみなみと
ふくらみのほどけ桔梗咲きそめり
夕焼の水路の魚の迅さかな
部屋中に飛蝗跳びだす帽子
溢れ来てまた群に入る赤とんぼ

夏 星

オーシャンの色して淡きかき氷
夏星や白砂の浜に足洗う
波音に夏の星座を仰ぎいる
涼しい朝冷やしミルクとドーナツ
夕立の後の匂いと空の色
新盆の魂二つ帰り来ぬ
球追えば芝に群れなす赤とんぼ

新 豆腐

夫と組む霊棚少し傾けり
ひたすらに幸せ祈り墓洗う
群雲を背に輝ける盆の月
秋の薔薇小振りに咲いて凜として
仲秋の朝の空気の瑞々し
秋茄子の朝の空気が揚がり濃紫
節電の秋の灯ほんのり新豆腐

舟 競争

夕焼け雲遊ぶ少年シルエツト
水遊びして吾が鉢花を喜ばす
とんぼ来てはこちらを見たようよ
青田風雀はこちらを見たようよ
風鈴のずらりと囲む休憩所
ひまわりと高い高いして島の親子
舟競争見えてきましたと島の盆

月 天心

逝く夏や原色で描く叫び声
雲切れて遠き山なみ赤とんぼ
振り向けば故郷遠く月天心
行く道や何か落とせし秋の声
物干しに忘れ去られて秋がきて
秋風に彷徨い行けど虚無の街
帰る道何も語らず夜霧きて

おけさ踊り

大榲秀先に秋の風立ちぬ
新涼や青をこぼして砂時計
砂浜に置かれしシャベル罌雲
鈴虫のすずの音拾いゆく水辺
秋草を手に帰り来しランドセル
大川の水ゆたかなり揚花火
太鼓一打ちおけさ踊りの動き出す

大 阪 港

四つ角でさよならの声聞く秋の暮れ
大阪港釣瓶落とすの帰る道
雨上がりの空き地の蟋蟀声高く
秋風に木々の音高く夜が明ける
秋晴れや洗濯物に陽の香り
手伝いの子の目の前の茄子の花
秋立てる電車の中の家族連れ

蕎麦の花

渋谷洋介

抜きん出て軒越えにけり鉄砲百合
民権の鐘の響きや萩零れ
谷戸山の地下壕の跡つくつくし
ビルの陰に祀る石仏醉芙蓉
焼岳の影逆しまに池の秋
新涼や風の香清し梓川
安曇野の水車ゆるりと蕎麦の花

露草の青

迫田和代

独りいて打ち上げ花火の乱れ打ち
秋に入り何処かが違う朝の風
湧水に写る草影秋の色
岩通る雨水静か秋になり
道の端露草の青沁みついて
影探し残暑を避ける町はずれ
月涼し迎える仏車座に

枝豆

原順子

県境大股で跳ぶ夏帽子
祖母語るお化けの話蚊帳の中
床並べ北斗七星涼を呼ぶ
枝豆や玉蜀黍の届く宵
ペランダを飾る朝顔淡き色
日盛りの陽よりも強し凌霄花
紫陽花の斑入り葉のみの枝を活け

選後に

高橋正子

橡の実の棘なき黒の転びけり

栄太郎

橡のつややかな実を見て、「棘を思い浮かべるのは、意表を
ついているが、言われればそうだ。「棘なき黒」が男性的で、大
木橡の実にらしい存在感がある。

爽やかに図書館通りの掃かれけり

〃

図書館へ行く通りがきれいに掃かれて、爽涼の季節を迎えた
うれしさがある。清潔であることは、爽やかさの条件である。

見ゆるものみな新涼の影を持つ

有花

秋に入ると、目に映るものが新鮮に捉えられる。見えるもの
の影にも夏とは違った新しい涼しさが加わる。

残暑の児気がつけばはや寢息かな

鉄

残る暑さのなかで、児は、はや、すやすやと寢息を立ててい
る。「残暑の児」に児を深く慈しむ眼差しが読める。

球追えば芝に群れなす赤とんぼ

宏

あおあおとした芝に球を追うと、そこは、秋が来ている。芝
生に低く飛ぶ赤とんぼに、さわやかな風が立つ。イメージが鮮
明で、句に力がある。

畦草を刈りて定かや稲の花

泰與

稲の花が咲くころは、畦草も伸びてくる。それを刈ると畦が

飛蝗

飯島治朗

青柿や部活の子の声青空に
スライダー水着の絶叫大空へ
大花火曇る夜空を金色に
施餓鬼会や居ずまい正す小さな子
子ら覗く魚の池に蜻蛉来て
保健室九月の測定子の背伸びぶ
帰り道飛蝗追う子ら草叢に

木の実降る

白川友行

朝市に野生と書きし茸かな
松茸の未だつぼみを貫いけり
古里の香の沁み出する菌かな
工事場の仮設の厠木の实降る
大漁や神は秋刀魚の死を悼む
若き母林檎をすりて熱の嬰へ
川の土手行く先々に彼岸花

新涼

足立弘

台風過空一片の雲のなし
新涼や人のまばらな待合室
夜更けて虫の音聞きつひと日終える
満月の雲を透かして輝けり
風そよぐ葉陰より見ゆ雲の峰
日の当たるトマト真っ赤に熟したり
鎮魂の花火大会更ける夜

さっぱりとして、稲の花の存在が定かになる。取り合わせの句
ではないので、稲の花が生き生きとしている。

満員の市電の軋む原爆忌

康水

原爆慰霊祭が行われる広島市の市電は、この日は人を運んで軋
むほど満員。やりきれない暑さと悲しみが詰まっている。

山々を吹きわたりゆく盆の風

啓一

広く遠く山々を越えて吹きわたる盆の風に、はるかな魂を思
い、ここにある命を思う心が、深く深く詠まれている。

さみどりの稲穂のうねり風の音

あゆみ

出そろうた稲穂のさみどりは、目に美しいだけではく、なに
かうれしいような気持ちにさせる。たっぷりの風にうねる音も
よい。

制服の丈を伸ばして休暇明け

祥子

「休暇明け」は、秋の季語だが、長い夏休みの間に、子ども
たちも大いに成長した。制服の丈を伸ばすにも、健やかな成長
を喜ぶ気持ちが重なる。

子燕のみな発ち空に声のあり

智久

子燕が育ち、巣立ちをし、みんな空で囀るようになった。子
燕を見る目がやさしい。空にある声に子燕のかわいく元気な様
子見える。

夕焼けの水路の魚の迅さかな

けい

夕焼けの水路に詩情がある。そこをすばやく泳ぐ魚も見てい
て愉しい。

正子の俳句日記（ブログ）

○八月二日（火）

（今日の俳句）頂の青筋揚羽雲に触れ 多田有花

山の頂には、こんなところまでよくも、というような蝶などを見かける。飛ばば雲に触れそんな青筋揚羽もいて、驚き、また楽しい世界を作っている。

簾

すだれ立ってかけて店頭トマトの赤 高橋信之

熟睡の子に簾内の青き部屋 高橋正子

マンション一階の西端がわが家族の住居で、その北西に信之先生の書齋がある。書齋の西窓と北窓に簾を吊って、北からの涼しい風が吹きこんでくる。

信之先生の書齋は、真夏でも涼しいので、そこがネットの仕事場にもなっていて、時には、私の仕事場ともなる。今日は、涼しすぎて、西窓を締めた。ネットは、毎日の決まった仕事がある。花冠ツイッター句会での入賞句を毎日欠かすことなく選んでいる。

○八月二十四日（水）

花冠発行所管理運営の「インターネット俳句センター」は、一九九六年十一月二十七日に開設。それから、十五年の歳月が過ぎ、本日、アクセス百万回となった。百万回の数字をどう読むかは、ホームページの目的等によりさまざまと思われるが、私たちのインターネット俳句センターがアクセス百万回を数えたことは、大きな意義がある。ネット俳句の草分けとして、さ

まざまな試みをした。細く長くをモットーとしてこれまで継続したことが、なよりの力となったと思う。
百万回をアクセスしたのは、洋子さんであった。二十一時三十九分二十五秒にゲット。

○八月二十六日（金）

パスポート

パスポートを受け取りに、川崎駅西口からまっすぐに七分ほど歩いたところあるソリッドスクエアビル内のパスポートセンターに行った。西口を出ると雨は小雨で、蟬が並木の桜の木でまだまだ鳴いている。インターネット俳句センターが昨夕アクセス百万回を達成したので、そのお祝いをどこかでするといつて、信之先生も一緒に来た。

前のパスポートは、一九九〇年に家族でドイツ旅行をしたときもので、九五年で期限が切れている。それから一度も海外に行っていないことになるが、この古いパスポートを申請時に持っていたら、係員の女性が三人も珍しそうに見に来た。小学生の元と句美子と私と親子三人が一緒に一枚の写真に写っている。今は、写真は、赤ん坊でも一人で写すとのこと。ICチップが組み込まれ、サイズも小型化されている。古いのを見て句美子が笑う。偽物がすぐ作られてしまいう。しかし、一番違うのは、写真に写っているわれわれ親子三人だろう。二十一年の歳月が流れている。十歳だった元は三十を越え、六歳だった句美子は二十七歳になっているのだ。十年用の収入印紙を貼って、係員の質問に答えて、すぐに交付してもらえた。私が十年先に必要とするかどうかだが。

子どもの俳句

高橋正子選評

大阪 小六 高橋 成哉

公園はセミの集団鳴いている

（公園にはたくさん木があるので、セミも集団でやってきて鳴くんだね。）

夏祭り友達一緒に遊んだよ

愛知 小五 上島光太郎

散歩道空を見たら稲光

（空がくもってきたのかな。急に稲光がして、驚いたね。夏は夕立が来たり、かみなりが鳴ったりよくするね。）

兵庫 小五 祝 桃果

せみさんよ私の声と勝負せよ

（せみも元気に鳴くけれど、私の声にも元気があります。勝負をしてみましよう。判定はむずかしいね。）

大阪 小四 高橋 博己

クマゼミは朝からシユワシユワ元気だな

（クマゼミの鳴き方は、シユワシユワって、おもしろいね。

朝から元気だね。）

夏空に打ち上げ花火の音がする

兵庫 小三 祝 龍之介

せみさんはみんなみんみんうるさいな

（みんなみんみんうるさいくらい鳴いてるね。なんびきぐらいいるんだらうね。大きな木があるのかな。）

大阪 小一 高橋 周也

ともだちとあそんであそんでなつやすみ

（あそんであそんで、「とくりかえしてるから、たくさんあそんだんだね。なつやすみはたのしかったね。）

せみがよくないていたあさあついいあさ

千葉 小一 伊藤美緒奈

ひがしむのをみたまきようがおわるんだなあ

（おひさまがしむのをみていると、きようがおしまになるのが、わかるのね。）

えだまめさんおすとビューンとくちのなか